南北朝史論
立
ヘ 13
3257

養生医者談義巻之五

一　孝子の育ちはよろぬ家の内証まで見せかへる同然のよろこび

親より請し我身の手足は髪なども念入て顧るは何よりまさる嘻

楽は苦の種。苦は楽の種。悪人種うまれ共は何も禄ど善人我より出すの種なれば。苦悪は水波の隔と。流れの落こむ所を。無我無心麻佛一如と。理を述るせんけの教も有とも在の中に住人なきを。がんぜうにして。よきうれいは我求るもあり。禍なきをおもひすじ。常ぐにんじ

へ13 3257

昭和十一年二月二十六日

薬を飲一盞よれいつめて。いつそう病苦よはらく。月日を
おくりはいく命終りてもまごあんど。盞を行ず。及て祝の酒
とあるも酒く多り死。仰の通出せんの月ぬこを樂多死新の中
所繁昌する。出産所といふ者所ありるが。祖父ハ実東の出性。今行安二世の醫者
の醫術ありるが。祖父ハ実東の出性。今行安二世の醫者
ホて。学文もお爲よ育て。家伝秘方れ妙薬。摘用こ書ホ
も他家よおとこずホ拵されども。父の代東ハ先アて今二代
ホのうこぞんと療治がふこりホて。毎々喰ホ過れ行安
四十二の年まで。法乃こ祝多ひも大こきくなり。夫婦よ
子供三人下女も居ほるこ。一人の薬箱拵も今ハ居れ色

ほふ仕合。ある時門俵を見ててのくりと。醫ハ三世なろ
ざれバこ茶弦張せずといふ。ほ云もおりて我も宮ほ
三世の醫者ほるが。仰とて出拵よ二代三代ふこりホて。適
ほ場弦すれバ。亭主の大病全快してかろ月上ほまひぶん
さんのお後賞掛り八法乃こ居きこて一ぶのあつらいよ旅や
ほ。ばよあこりますれど。お醫者の薬代をそふハるまいと
私一人がざいふりはて。三分のあほらいよこ世はてお手り
五百張の不。治一枝第上まほといふて。ほ拵人がんよこき
せ無て拵て来る拵ほる。江戸の親ほひハ孫も色く東
ほ一家一つハ医。なくと食ふといふ子供ハ三人色て八面行

様はさてあれど極月ごろひやうといふて仆安き口徒重
といふ大病。実て口後の痛の若しこ腹りおまの乳がかと
ある夜。素人付ゞ恵ひでハ法度りませぬ。今時の医者
流ハ大ろく絶流のたいこすをでうけ祢バ一人徒ゝれる係
の療治人ハ。ちゆぬと藩の古ものの門後ゞ。ちゆもけさ
とて言てゞ口祭りはこゝ。又東藩の方ゝ水夜がゆるゆこされは
すハ商世のお医者ハ学文よりハ。ロ利こふゞ貴一先の医者
ゞ大ろこ行ごゝ医。熱も恵生もちりぞけさをたいくつーて
医者をうてこ辺ある夜。ゝ先ハ法く吸收する病人と人てこバ
粒先の医者夜をそちり。我ゝ今こ日ゝ人世祢がおそいと

一生ゝ懐ハちをちゆぬなどくいてこ。療治ゝかくりぬずこちゆく
ゝ祢ゝ祢をーてだどゝも吸ゝ手めてこゝ。いそゞそふて人世。番
こゝお来るちゆ。商ゝ者ハ黒ハ後やゝ我こをーてちりと。諸藩な
小神ゝ祢織と。毎日も番ゝ。鼻ゝ人ゞふもちこりぬ。おこまりこと
ちこりーて。色くたんちゝとこうそこ法ある方ゝこ。諸藩な
番ゝと小茶我まゞ合せて欠こバ。こゝ人世ハ出来ぬげよ
法ゝ祭りまゝ。上所の古草。雲ゝ所ハ。元是袋やのくて横下
の。本村ゝ妻老ハ。番ハ枕木後の性魚長子。ゝ本人る
法ゝ本調安といふ減刺ハ。上の店の元奥後の表ゝ方といこ
ものゝそれゞ今ハ歴くのゝお医者ゝ去ゝちゆて口徒祢ちゝこ

百番
女ごるちゆとうさぐりてくらのよ
アイくそれへ
りてまいります

おうげでめもきつく
よろしくござります
たくんくおこやがよふありまん
あのこまるおこやに
よろしくござりまして
よろこびます

て療れますとの咄でしがそれを笑ひたいさを出せい
まつ〻なかまも醫に仁術じやのと一人ついきつこ云
るハさつゐまぢのと云ずとちと風をうへてからにしまを今
ろ極月をあんじ月花の蕾つるひ色こせうより人よ元
へ行ゐをうの色こハるんでもるひるとまぶ見をいわく
と云ひしるを幸のわとそを一重咲るが竹安も元よ
るぐ。遠も我が性はまつなきよどんハ行ぞ。今
ろふ祖ふハ行まいるれど。俗ぶん見ろ世ろふ勇を通り
ち。風をかしくてんよ。見といふも子位が育あと事ふ
はなちられしが。五月黄昏後分ニ見那一人の僕も賜

をかしいとや茶話、我懷中してあくの療治をとせろふ勧
出られるが。いろ多時世風俗。有ろいの揺病も前よりかるハ
世のちろい。呉今行るもも寄世ふちさがふも。一つの發的竹安も
少し月後のいさめを少入。乳拍をろへて病月伐勧られし
あ。ひ比ふく数もふ母る極子地ハ子文も有こ世お憂の醫
家ちる。竹安重ふの冨家後所人より。ふと療治彩よ来
臣が僕も法れぬ庸醫の雑。お意ハ下女丁雑ちどの
療治牛を彩るが。人を能一毎人も小むつしき病人全快
せしあ。至人分の療治も。打ふハ西彩ハべきと。裏以よりの
円ふ。竹安も富くろり円義ふも悟して。時芸そろく来

せーとぞ。紀中も仏仮業て快落くれーぞ。門義八元分
いさめを用ゐふ医との恢誠は天の助八是わどもくふ仕
合でも。おもへれの当病なが。大きる私たの仕合。是ょ方まぶ
四病身なるバ仏のとうせん。是をふて是りますぞ。祈仏へ
の四礼とぜ言夫婦ムも世勇名ぞ。又を示の職人業礼
もまるをむなを方より。和て療治を形ょ為ひ。一形ょ
ても新ひくと。医竹成薬和の板ょ。者世のちりとも
どうて。竹安ょ乗ょ人白れ名ぞ。夫婦ょ子位二人有。丁雅
を祈ぶ家門病療。若門攻をれて家門祈ぐぞ
後業ちを択れ。竹安八是をれく。ぜせんの療治も志

られ法きど。根ぞ当病人ゆ。ぞ多もうつりくるり自。四
ゑ人の元ぜんをさが業をもちるの。れバ。家ふて十四ゑ。の業
形。ゆ収ちんをうょ無て。先前防敗毒数悪冬金結
発などを。加味して。ちるる方。脈一人く丁寧ふ人室
て。女房ょ八積氣のかぐん。ぞ四ょ八虫の加減などてけぐい
ちく方ちりもん家。日ふりて至数ニ多。ちん脈ちれ
なるぞ。その法八和ゆ。土長の年表義志げくふ。義志
法治方。非人などハ後の温泉ふ南れ。数百人京大坂
まて病死せーぞ。町家ょ住人とぞども温氣交安を附ろ
れバ。当病の竹安も。ちゑ身ょ女ーぞ温邪ふくを有家ろ

氣の毒ハぜんぜんの氣を受てぜんぜん療をうけ申。三夜のうちよるのゆびのまたハ云よ及ぶず。脉不ととのヘ猛までもだるく胃とおるゑぜんぜんうさの不一ハ。療治よりれもすれど彼毒法より入也。家家成町人或ハ他病家ハとんと療治よ行るもるず。さりとハ肩の悪いハ竹妻そうく盤品も志をふよ成。一ぶてぞひもよくぬうつりぜん至夜指のまたひをなぐめて門義とも眼とめをさん合せ食ハ常より能ふ進む。氣ぶんの悪敷るもなけれどもで人の脉ハどふもよくれぬせめてハそうこや子さよぶつぬ指ふきれと今ハぜつとり南愁きれきもたりもり

きよせん二月やに月ま人中へ毒の出さるく指ふるりハせめふ山ゆるぐ。先高ぶぜせん茂人ま源し。療治ぶ来れハしさ名ふ枝出て。引居ると山ま化ぶを沙ぶ自然小療門攻せバ。而年目と名別極用ぶぜん茶を合ぶて日ふこふくつ除で。名ま痙後りをユ支きれしハ。東木成町二条巷の和廣門参と云。外料の製法ぜぜん混の茶湯入てまる後り。茶湯料ぶせん目ふて一ぜり。せん入湯ぶんんとそ毒るく。毒乗高と懐中ーて。外ぶはより行発日湯治及るぐ。ま是ぶ志ぶれる程ぶ。ーぶ療成。病療れど。此の名病成竹妻。ようぶりしぜぜん成ぶ。毒ぶりふて注ぶ能大ぶか

せずしゝも安堵のこゝひいらくまゝ塗板にとて又そのの
湯治に入るゝ。今ハ入湯の病人浪病をぜんうさの友多為
的書よも山の俗世とのゝ為さすが竹安醫師のとくふて救
十人の湯治人がうまひ豚成ゐんてらい。書生のと
毒悪行のゝを為ひ前の功老人とて調法とひろひ為ゝ二階の
別住宿小。年の比六冥放有法人の一人嬰子。代丁雅
百つきて。色も入湯治おゝ小竹安を教。二階くゝて菓子茶
ゐど成おゝして地之志ゝ為ゝ流ゝいふ湯山の道ばれとて竹安
も好ひ。三ゝ到深きて病元の板子を為ゝ色ゝ又ゝ人の
浪疫。初メハ痒瘡使毒口攻より板くゝと反疫いゝ揚毒

瘡ゝ去年ゝ為ゝ今ゝ小腎うすき。色とお醫ゐハ
京中大ゝゝて為ゝ。茶ハ教加ゝりのふ欲つくゝ。七宝丹
丹山海来も十人行ゝ下はされとゝ伝のゝん根切ゝ来ませぬ
世ゝ法つゝて。茶湯ゝ去世ゝ人板子成ゐます稀ゝ。一時
年但ゝの湯ゝも又世ゝ。入まゝ。さとの俗の上ふて。苦労
ゝゝ二ゝ孫成ゝ瘡ゝ下ませとゝ成おゝ為ゝ竹安もと
ゝん孫ゝてゝされゝ為ゝ。ゝなゝて言ゝふハゝされぬゝ為れど
ゝ云ゝ。茶湯ハゝふ為ゝ遊ゝ為ゝ。ふ今ふて浪毒安の態
選ゝ。今ゝ為ハ日ゝ為と。安脂ゝ。ひて盲目ゝ為ゝ世ゝ為ゝ法
豚薪。病人もゝ代もゝつゝ。て。有板ハ湯ゝ入まゝ為ゝ

右の眼ハとんと見へませぬ。何ぞので氣が身ほどさが。よろしひ
左の目も。一寿るハ少しかすミましたおろそ様のひせんをうけ
候ても。うつしうけ移りませぬが。ござぞうけ療治ニてひ左眼の
らくニ成て下さりませ。医按ハうけ移りますまいか。それハ心安い儀
拙者ニ於て日外かくの薬の入子も存じます。左眼ハ申ス及ず
骨うずきさ湿一切。根切をして進ぜませう。湿病がひぜん銭う
つれハ大ニ宜しくうれども。申くうつれず。それハ心安ふ言
と。竹安ニ仕合成より。丈夫ニ待合来たれバ。身代もた丶に数多有
私宅へ御見舞ニ下さるべし。私ガ宅ハ室町三条にて。淺や喜右衛門が
忰幸三郎と申者と。云門子七ツ時竹安約束して宿へ帰

られしが。幸三郎も共に帰宅。其あより竹安。薬箱懐中して
彼室町へ見舞れるが。身代十人斗家内上下三十余人を
召つかふ呉服屋。安親にも面会して座敷へ通り手づから
三貼調合して帰り。翌日又々見舞又薬をこしらへ。三日目よりハいくつ
んとよろしがるこのあざきるやるんで見舞。様子を問バお氣ふて痛
痛ハさらりと止。眼も右の目ハ少しもかすミなく。百日斗さんと
見へませなんだ左の眼が。段々と少しづゝ見へまする。是で親
子を始家内下々迄悦。其外かく御切療ゆへて此様の御恩を
かうむりて御りますとの悦。安親ハ竹安をお薬師様。氏神様と
拝ての一礼。其日ハ稽く池田にて竹安[illegible]にて馳走

らるゝ。ぜんの代が禅苦しゝて来り。ぜん蔵座の出れ四着科すんしるがうと。揚ぎすをまれば。金二千疋屋子礼をのぐて身代を改し。竹安いらく暦をぎ紙通ぎしゝ。ぜんとりめに華ぎうる支服ぜんうる放。還疫病ぢくせし友ぢ。ぜんの療治をぞぐんと根絶切て金使せし友。嘉月乾日竹安を請ざ。ぜんして。家二門ぢりてのぞ猿振竈。拙菜礼として金三十表ぜん祝義として張十枚に。ぜん三重三疋円義より別より円送にて。紗綾縮緬の小袖二重子稽代として。金三表竹安方へ納り上。還一座の名暦ぢ年といふぞ。徳屋一家中八分清。宮町座の多限ぢより。ぜんの清汚。ぜんハぢる菜湯ぢ殺

してさてまとなるり。ぞを年の苦ぞて。金和石安といふかぐひ小判ぢ。ぢうう振り。ぜん年に玄関身の家を求てぜぐぞふませての身礼。ぞ比より。ぜんぢ歴くぐ。ぢう入して。ぞ投ぐぐに伝ぢうる。ぜん門ぢ稼ぢと。ぜん人竹安をぐぞぜんの時ぢに。ゆびのまぐ銭ぢんて。ぢくく注ぢ。ぢてぐぢ門。銭板ぢ。縞講ぢ小袖ぢ。武重被ぢ。ぢての収。鄙ぐ。蔵の板ぢ。ぢぢぢんぢふ。大佛ぢく。拙ぢん識ぢふるりしぢ。ぞ世の暦。鄙のぐぐぢや

(二) 安房の霞云八一向ぢ天生記生の苦悪ぢでめ

時り。ぢ恵鄙ぢうんぢ。ぢいるびとぢ。ぢたぢ。紙の手ぢ。拙ぢの四ぢ夕陽の法ぢ。ぢりぢすれば。ぢ一席ぢて嘶ぢ

和山夜ごゑハ酒屋より仕つらへ出しけ候ハ能ふ市場る程よ
ゝ行ゞりと竹きまを。京作の醫者よ。濱沢市好といて学
ゞ人ゝすゞれて。療治も功ゝ入る。古方後世蓋常の上手
匠が。ゆ七八より療用と勤ゞ。ゞ年冥冥見を変くゝ拡成
して。格別成業礼を収納し。門徒ゆゝにゝるれしるも
変く有ど。今ゝ下女の一人も治ゝ手ゞ七ゝ上を行ゞ七
といふあ房の墨履元兵一人ゝ婦のゝゝ下ゝ成娘ゝ人
ゝあて四人ゝ言を。一盃に行ゝゆゝゝ代紙なゝゝ蓋ゝ
ゝゝ。ゝゝゝ行ゝゝれバ。生活ゝ茶お場に蓋ゝゝ好ゝ
蓋の古用中なゞふハ。向療治哺ゝ来ても。お場のゝゝに

動成ゞのゝはして。勤をおゝてゝいつでも門義ゞ。ゝゝ義ゞ
ゞて来ゝ。療治に動ゝれはて。ゞゝの程ゞ知ゞゞとの
ゞ上。ゞ年ゝ合ゞゞりゝまに成て。ゞく仕合ゝゝく。ゝまで
屋ん名ゝ成て老の中十ゝ分鮮といふ。ゝふ時行の実ゝ秋
の実財ゝゝ大ゝりを待て。ゞ上ゝゝゞり折ゝ門義の姿
教も娘の衣教も。下の町の七左ゝと云ゝ張ゝ。の義ゝお
ゝゝゝ。ゞゝ成あゝゝの方七ゝゝゝの布かゝゞゝ二ゝ成
ぬゝゝ合。男成や娘のかゝしゝハ毎夜のゝなゞゝゝそゝ。の
秋の八題月にゝゝ三て。ゞゝる夜市好成への諫。実ゝ以古用
ゝゝゝゝゝゝ。生業お場の悔もゝまゝ。ゝゝめてゝ以古用、

三日めから占けるに出たる卜して見るが夬の卦にあたるのを
いふてハ女房娘を亭主もつこあれば秋ハみんなひいて根まゝ身を
合せて見ん未来が悪変風が吹からんさ故。二百十日ハ大風じや
考て見てみれバ巽の卦ぐるぐるさの。秋のお端より一も◯まさ
らぬ二爻浜ハよしぬ羅の跡よりの変をよんでみれバ窕て從弟
八上ハのと云て又それ◯雑藪癈治深にするとて皆も鳥殺人
おすも奇方といふもヒガむの苦しさをちつとすいか手して
下さりませといへバ娘も夜に母とはしたりるがおかしの北六
さんの苦ものふ夢生に寝むり抵しが化ほまつぬ脳吹ぬ
を幸にして去りもせずまくふして匿故よとするなりての

真枕なる鼾で夜ま休り。ねむり来つざとない寝言中に
一声きりけう多言をいふしハソリヤク味そ汁がでるといふ一
上でおんふりくがるよ掌で幸つさりと云ことでんかくのかな
んが能くずり鉢を屋根へおかり上ちりかも無れもさんざ
ま〜引かけさむりんべちよろうたんごにせいちろ之声て大ぶき
寺と。介の字耳に云て鼻かむ様子。お房お娘の寝言市好の
耳へ入しが。徒志つづきて諌をいふ。女房娘に彼宗平さんにお
場をすハ必ず気なれど。よくをよふ吹てたしかに又寸上有切を
質おふやりて十友といふ金を入金。上りを請んと常人なる
蒸がはやくありよ成てのふ喜合。入金が八友弥当の換にし成

て。今さら女郎の誇り金。金ゑ夜中まで金を直く貸して
へ出バ明日（あす）まで小林も惑（まど）り。利方にかまわねでもなけ
れと。金を夜具（しき）金銭入ぬと。八女郎が勘当（かく）して。中宿
の借金をけし。持（もち）業を一ツのまゝにてよもや。見がくちかしい
今女房めが寝衣を咲バ。味噌（みそ）汁がてへ。飯へ上るのすり
鉢と屋根へ上るの。こんな事の上る辻（つぢ）から。鉢の一番（むだ）大きさに
あるまいねでもなし。ござぞ金宮へ女今の事を見えして
一生業市（いち）の仕納（おさめ）。あくを一ツぞんざんでなんとしが。仕損ないかと
いふ事ぞな。女房姫もいゝ稼ぎ又あてらで仕合があるまいねで
も送る。種安房が稼でも八。上へ（のぶ）家借るの縁（えんだり）斗と気が

寄て稼ぐのは辻うらハ。こりやしも重宝な母うんすれど。定めて母とても
金子。その夜中に出来ぬが。ござりましてお来ませぬ。親子が若（さい）替へ
持て手を出して。何と工面（めん）が出来ぬ。おとゝいハ。市好んで業物の
具（ぐ）ハ八百銭寄るとぞろくなお。ぞさ見せ付くよ合んさ
張のさし。張の卦算（けいさん）で張ハ丈夫に調べ。業物で
金さへ女ハ尚来るもの。今おしの代おハ。今出てゐる稲織
とも銀簪（ざし）も。七ツの衣へ預（あづ）けて。出来の見えぬとなえ
こそ。ばそれを見ぞらしてく。藤治を呼（よび）に来た時るんと成
ませぬと。姫が気の急がる所へ。前ませんの座玄関の明かりが
暮（なぞ）さより。はめんあきりませぬとて彼の日代へあり。あれハ

市好様。お宿は何処でござりますか。私は当家の主人亀毛の一人
子。当年七つに成りますが。是は疱瘡が内攻いたしまして。お医
者方は。第一大きさくへはしたれども。ごろうともおもわれ。只今虫の
息斗で。落ちつくを待ております斗。ある人は毎日壱寸五分
ほどなる処。あまり是をおあらしませるんざハ。急なるに合
ますやうと存じましての事。どうぞ捨物の只その一寸お見下
ましてに。乱れ下されませ。有がたい仕合。直に私が代つて
頂ませと申して。未市の内より飛御おもて快さし
ますを。市好様でござりましたが。只今は大人に令
くだされ度所万…

延引に成りましたが。御返事次第にて早速ながら切落し仕廻申
しあげます。隣家より呼にまゐりました療治より八。未市が大切の場
所。お房の寝て居ります気先のご縁ござりませうかと気が紛れ
御日限八日ましたが。追付それへ参上致すといふて。手代を
呼し。私ぞく飛脚を出させて自身薬箱を負ひ持
ち。咽をもて金三両かりて置り。跡ハ明朝寄すべし
是にて薬をつかはされと返して飛脚を出し。私ハ又
宰相の方よりの使でござる。只今おつと申と私も来り
是非なく役目ましておかれしが。ちやうちん持が薬箱を持て
行と言て。門ぐ合点それへ参来に持せきし

ひきやどのたいざで
うれやく
まんどのそうでよけにるつこと
すんがあるうてさ
ホアくたんなどの
これ〳〵や
ちりそすごかりやつ
ちろりとうきまする

ござる
これ〳〵いろ〳〵のうひのでござりすん
たかあぐしかそざのうれひすそにさ〳〵ニキする

ませふと申の一寸のがれ抜先へ行て疱瘡人を見てくれしが
京中の医師が手をも付らるヽ事ならぬ所利一向生の息
斗にて十死一生も見えず。捨おかれて薬を用んと云れ
しが。常に薬箱の持ぐるしき先の手代どもが薬箱ハ
跡から来がおそくて見えず手分が先ハおそく[illegible]
かく男どもに申てましまするふおうそく様ハ先ハ[illegible]
ましといふ所ぜん方なさと一ツの手の井有さし上薬をとり出で先
ハまづいぬ疱瘡の内攻捨おかれて。男どもが云様にめされ。上
角も見たと有バ是まづせん致方なし一ツ手前の薬流と申ハ
極上くの諸白酒を薬てんにして一盃せかんをして。最初に

に。一盃ずつ二盃斗ど呑されよ。すぐさまにて命も有バ薬を用ゐ
せふと云れしが。是ハめづらしいかいと云でも随分奔走にて
て名医の捨たる疱瘡を。是にてすくわれしと評判
称られしなれど。是を一度も行ても見ず。人かさせ
療治。じ又ハ薬箱ふ手はなしたと。此薬で気がもめるとの
様子より是を云ひしなるが。去家内も安心して。逆捨置の小児
とて諸白を茶碗につぎて手ぐり見にそめつくむせぬハ小児
の口へ入るが。酒薬てんに一盃呑り残しを飲むべく六ツ時から白け
ころも上奈かにて。ところ痘も能く成いよ
しうなて起ありて居り。陽気の血めぐりて日の出にござれ

里記録上。乳母桑ぢけを食ふといふ麦を煮と。母親初メ
家内おごり上りて悪。市好我氏神祭じや。お菓師祭じや
と。屋内ゞ乱れ市好もうれしく。家内の奠菓を見もより
用まをぶ。菓ハ宿へ帰り調合致さるバうちんと名服文字
無て点てめ。四度点てられしゞ我家の門口で。又茶市の
日蓮師祭をんれば。乞物ゝ。ぶく。来る
ようゝ成。今市接分引戻し。全三毋斗の利分ゝ義
やれとの。紙。療治の。福と。お場の。合とを。門紙姫安
さるれ。祐本に死の候こる家口の悪。ゆを中一彼家なな
方よりの使お菓次戴仕う。見ハ。毛氏怪ゆるゞう。商売の

四礼として。全紙袋ゆ様。着祝義を収納し。菓を参し
日も又月毎れしゞ。ぶく。ぶくと日立て。疱瘡も湯みの祝也
お二芝の墓様に大朝二尾。全子而毋といふ貝殻。をく五稽を
ようしさ。ちて。家屋敷を売を。毛より市好
家ぶり市るを。山ふして。波の名賢かいを年も明の墓
んと貝毋反元旦を移されたでハ四殆ゝ。ぬ。療治とゝ
たれ。上を。宵ふも知きを。伊ゞ菓小後まるともヤ
されず。兵学文を。ぶれし上の。乳てんゞ大ゞで四殆る
読まれも見を。ひと。等らきを。和終日のお場り先姓
泊て。毋の終で。市殆る

笑侯醫者貧氣卷之五終

安永三年 午 正月吉日

京都書林

京東洞院通仏光寺下ル町 林伊兵衛

堂前通神明下ル町 武村新兵衛